



## 添削指導

先週の木曜日と昨日の木曜日、ハロウィンなど関係のない（というか、苦々しく思っている？）国語科では、河合塾から古文と現代文の先生をお招きして、東大と京大の入試問題を題材に、これから本格化する添削指導のポイントなどを研究する会を開いた。

国公立大学を志望する場合、まずは全員がセンター試験を受け、その後、その結果を踏まえながらそれぞれの大学に個別に出願して入試を受けることになるが、センターがマーク式であるのに対して、各大学がそれぞれの志願者に課する二次試験は記述式となる。例えば東大の場合、▼文系＝国語（現古漢）、数学（Ⅰ、Ⅱ、A、B）、英語、地歴2科目 ▼理系＝国語（現古漢）、数学（Ⅲまで全部）、英語、専門理科2科目がすべて記述式となる。

「記述」などと聞くとイヤになってしまう諸君もいるかもしれないが、マークなら○か×かの2通りしかなく、センターでは1問8点などという問題もあるから、それが×になると、まるまる8点を失うことになる。一方、記述式の場合は、加点要素や減点要素などの採点基準が厳格に定められているので、答えるべき要素を一つでも踏まえた解答を書けば0点になるということはない。しっかりと学習して準備をした者にとっては、安心して実力を発揮できる問題といえるのである。

\*

3年生は、後期になって、文系なら社会、理系なら理科の学習に重点を移し、同時に、文系ならセンターの理科、理系ならセンターの地歴・公民を意識した学習を展開しているわけだが、それと並行して、少しずつ二次試

験対策、つまり記述対策も始めている。

国語科では、毎年3年生の現代文と古典担当者が個別添削を見ることになっていたのだが、例えば私が前に担任をした時は、3年の現代文の授業と古典講読の授業を担当していたために、東大や京大・一橋・筑波の現代文の問題の添削をしつつ、同じくや古文や漢文の添削もしなければならず、赤ボールペンを2本使い切るくらい大変だった。毎年のもので、それぞれ3年の担任になった時は覚悟を決めてがんばるのだが、我々の負担も大きいし、生徒の側も添削結果が返却されるまでに4～5日かかってしまうような場合も出てきたので、今年は先生方と相談して、思い切ってやり方を変えてみることにした。

①3年の授業担当者だけでなく、国語科全員で添削に取り組む。

②授業担当者に添削を依頼するのではなく、大学別に添削担当者を決め、生徒は志望大学に合わせてその先生にお願いする。

という方式である。教員側は、守備範囲を区切ることで負担が減り、その分、添削の精度を上げることができるし、生徒にしてみれば、先生一人当たりの担当生徒が少なくなった分、早く添削結果を手にすることができる。

私は今年は医学部・看護系担当。すでに添削を始めている。河合塾の先生も、最近の生徒は記述力が落ちていとおっしゃっていた。日常の授業の中で、先生の問いかけに対する自分なりの解答を（頭に思い浮かべるだけでなく）サッとノートにメモするなど、意識して記述を学習の中に取り入れるようにするとイイだろう。これも積み重ねである。